

保育現場における臨床心理学的支援の検討

——「気になる子」に関する保育者へのインタビューを通じて——

Clinical psychological support in childcare services:
Insights from interviews with childcare professionals on “children of concern”

古田 雅明¹, 廣瀬 雄一², 田中 優¹, 春日 文¹, 宗 杏佳音³, 沼田 真美⁴,
山本 真知子¹, 黒川 こころ³, 柳川 麻華³, 松本 千明³

¹大妻女子大学人間関係学部, ²鳴門教育大学, ³大妻女子大学共生社会文化研究所, ⁴目白大学

Masaaki Furuta¹, Yuichi Hirose², Masashi Tanaka¹, Aya Kasuga¹, Akane So³, Mami Numata⁴,
Machiko Yamamoto¹, Kokoro Kurokawa³, Asaka Yanagawa³, and Chiaki Matsumoto³

¹ Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-city, Tokyo, 206-8540 Japan

² Naruto University of Education

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502 Japan

³ Institute of Inclusive Society and Culture, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tama-city, Tokyo, 206-8540 Japan

⁴ Faculty of Psychology, Mejiro University

4-31-1 Nakaochiai, Shinjuku-ku, Tokyo, 161-8539 Japan

キーワード：臨床心理学的支援，保育園，認定こども園，気になる子，協働

Key words : Clinical psychological support, Nursery school, Children's center,
Children of concern, Collaboration

抄録

今日、現場の保育者たちは地域に開かれた子育て支援活動へ取り組むことを一層期待され、より高度かつ多岐にわたる役割を求められている。そのような中、発達障害に関する知識や情報の急速な広まりもあってか、現場の保育者たちの注意を引いたり、何かしらの懸念を抱かせたりする、いわゆる「気になる子」への関わりが、現場においてとりわけ重要な課題となっている。

本研究の目的は、「気になる子」を取り巻く問題に注目しながら、保育領域における臨床心理学的支援に対するニーズを、現場の保育者へ直接アプローチすることによって具体的に探ることであった。調査方法は、現場の保育士3名と管理職3名に対する半構造化面接とした。そこで得られたインタビューデータに対し KH Coder を用いてテキストマイニングを実施し階層的クラスタ分析を行い、さらに層化共起ネットワークによる分析および対応分析を行った。これらの分析の結果とテキストマイニングにより抽出された語を含むインタビューデータの分析から、保育士による「気になる子」への関わりにおける数々の工夫と、その体験における困り感が見出された。さらに保育士たちの困り感の解消を目指す管理職によるサポート、特に施設内多職種連携や他機関連携をマネージする姿が浮かび上がった。このような保育現場の実態を背景にして、①専門的な心理アセスメントを活用した協働が挙げられること、そしてこの心理アセスメントを基盤にした、②保護者への関わりや提案、③他機関との連携、④保育士へのコンサルテーションの4点が心理職の貢献可能性であると考察した。

1. 問題と目的

1.1. 保育現場の現状と「気になる子」をめぐる

今日、現場の保育者たちに求められる役割は、子どもたちそれぞれの個性や発達をふまえた臨機応変な関わり、保護者らとの円滑なコミュニケーション、地域の諸機関との迅速で適切な連携など、より高度かつ多岐にわたるものとなっている。その背景には、2013年の「子ども・子育て支援新制度」の策定以降、全国の保育園・幼稚園・認定こども園等の各施設が、地域の臨床心理や社会福祉の専門家と連携し、地域に開かれた子育て支援活動へ取り組むことを一層期待されるようになった昨今の趨勢もあるだろう。

そして発達障害に関する知識や情報の急速な広まりもあってか、現場の保育者たちの注意を引いたり、何かしらの懸念を抱かせたりする、いわゆる「気になる子」への対応が、現場において改めて重要なトピックになっているように思われる。

そこに着目した筆者らは、国内の先行諸研究における「気になる子」の定義を改めて整理した^[1]。その結果、定義について、「①集団での不適応に着目するもの」、「②就学後の懸念に重きを置くもの」、「③発達障害との関連の深さに着目するもの」、「④発達障害と診断されている子どもと「気になる子」を分けて考えるもの」、という4つの分類を得た。

しかしその分類には、それぞれ課題があった。

「①集団での不適応に着目するもの」という定義は、主に集団の和を乱しがちな子どもを想定するが、人手不足など保育現場が置かれている構造的課題の影響が見落とされているように思われた。

「②就学後の懸念に重きを置くもの」においては、そもそも保育園・幼稚園・認定こども園をもつばら小学校教育の準備段階を担う機関であるかのように位置づけてよいのか、という疑義が生じた。

「③発達障害との関連の深さに着目するもの」という定義は近年広く用いられているが、現場レベルでの「気になる子」イメージが極めて多様であることから、範囲が狭すぎるとも考えられた。

最後の「④発達障害と診断されている子どもと「気になる子」を分けて考えるもの」という定義については、発達障害と診断され、かつ「気になる子」は少なからずいるであろうという反論を免れないことは課題といえた。一方で、何も診断を受けていないからこそ人員の加配などの支援制度

を利用しにくい、といった保育現場の現実もそこからはうかがえた。この点は保育者の困り感を検討する上での重要な示唆であった。

以上の検討より得られたのは、保育者たちそれぞれが「気になる子」という言葉に込めた意味や定義の幅広さ、多様さであった。そして「気になる子」の定義をひとつに明確化することは難しく、またむしろ明確に定めないほうがよいのではないか、という重要な気づきも得られた。安易な明確化の試みは、その言葉がもつ複雑さや豊かさを台無しにしてしまいかねないからである。

また上述の定義以外に、近年では「気になる子」と愛着障害との関連も指摘されている^{[2][3]}。一部の児童養護施設や里親家庭などの社会的養護下の子どもや、虐待や貧困といった成育歴上の困難を抱えた子どもの愛着障害についても、「気になる子」として目配りが必要であるだろう。

そして筆者らは研究を継続する中で、保育現場の人々から「気になる子」が最近増えている、という声をよく聞いた。「気になる子」にいかに対応するか、というテーマは今日の保育現場において非常に悩ましく、かつ切迫感を伴った重要な課題になっているといえよう。

1.2. 心理職の貢献可能性と保育者目線の重要性

このような視点に立った時、臨床心理学の見地から子どもの心身の発達の様子や心理状態をアセスメントし、個々に応じ適切に対応するための専門知識を有する心理職の貢献可能性は、改めて注目に値するように思われる。

また筆者らは前述の研究を通じて、「気になる子」という言葉は、子ども、保護者、保育者、園の体制、社会制度や行政的対応など、それぞれが有する諸課題が交錯したものが、保育者の体験や困り感を通じて顕在化した所産であると考えに至った^[4]。それをふまえれば、「気になる子」に関連する問題を精緻に検討するにあたっては、臨床心理学の視点や枠組みでのみ考えるのでは不十分であり、現場の保育者の体験や気づき、とりわけ現在の困り感を出発点とし、保育者目線で検討することが欠かせない。

以上のような着眼に基づく本研究の目的は、「気になる子」を取り巻く問題に注目しながら、保育領域における臨床心理学的支援に対するニーズを、現場の保育者へ直接アプローチすることに

よって具体的に探ることである。

これまで、保育現場での心理職による支援は、ニーズとしては繰り返し唱えられてきたものの、現状はいくつかの自治体における試行的な取り組みにとどまっている^[4]。全国的には、保育領域における心理職の配置は、スクールカウンセラーがほぼ行き渡った小・中・高校等に比べて大きく立ち遅れているという現実がある^[5]。本研究を通じ、保育現場でいま求められているものに合致した、実践的かつ高い実現可能性を有する心理支援のあり方を探求したい。

2. 方法

2.1. 調査協力者：2022年11月から12月に、A市内の認定こども園1園、および保育園2園の計3園の保育士6名に対し、縁故法により調査を依頼した。役職の内訳は各園の管理職（園長など）1名と、所属の保育士1名で、計2名ずつであった。

調査協力者の保育経験年数の平均は、所属の保育士が20.3年、管理職が38.3年であった。

上記3園の内、2園には心理職（臨床心理士・公認心理師）が在籍しており、1園には在籍していなかった。

なお管理職と所属の保育士それぞれにインタビューをしたのは、勤務年数に差があることによって生じる経験や知識、保育観の違いを加味した、より質の高い検討を目指したためである。

2.2. データの収集：半構造化インタビューによる調査を実施した。Covid-19感染防止のため、インタビューはすべてZoomを使用しオンラインで行った。面接内容は同意を得てICレコーダーで録音し、まとまりのある話題ごとに段落に分けて整理したインタビューデータ（逐語記録）を作成し分析の対象とした。インタビュー時間は46分～76分（平均63分、 $SD=9.8$ ）であった。

インタビューは毎回2名とし、1名は社会心理学や臨床心理学を専門とする大学教員、もう1名は保育心理臨床活動を行っている臨床心理士・公認心理師資格の有資格者であった。

2.3. 調査内容：インタビューガイドに沿って、以下のような内容を尋ねた。

・保育上「気になる子」について印象に残っている具体的なエピソード（困難に感じたこと、工夫

したこと、誰かに相談したか、他の人に相談できない時にどう対処したか、など）

・保育上「気になる子」の保護者へのかかわりについて印象に残っている具体的なエピソード（困難に感じたこと、工夫したこと、誰かに相談したか、など）

・上記に関連した心理職の貢献可能性についてどう考えているか

なお本インタビューにおける「気になる子」の定義については、前述のように明確に定めすぎることは適切ではないという考えのもと、原則的にはインタビュー協力者それぞれが考える定義の仕方に任せ、それを尊重することとした。

2.4. 倫理的配慮：事前に研究の説明書や同意書等を郵送し、同意を得た上で、デモグラフィック要因に関する調査票（Google フォーム）を調査協力者に送り入力してもらった。また、インタビュー開始前に説明書を提示し、書面と口頭とで改めて説明をし、同意を得た上でインタビューを開始した。なお本研究は、大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の承諾を得て実施した（受付番号 04-025）。

2.5. 分析方法：保育士と管理職、それぞれのインタビューデータにおける「気になる子」の保育やその保護者へのかかわりに関連する頻出語に対して、KH Coder (3.Beta.07e) による分析を行った。

KH Coderはテキストマイニングツールであり、単語の共起関係など統計的手法を用いて分析できるため、分析者の主観に依存せず、客観的なデータ処理が可能となる。さらに KH Coder は、事前の仮説なしにデータのパターンや傾向を探索的に分析することにも適している。

本研究は探索的な段階であり、また縁故法によるインタビュー調査を行っているため、なるべく分析者によるバイアスを排除し、分析の客観性を確保する上で KH Coder によるテキストマイニングが有用と考え、採用した。そして、分析の客観性を保ちつつ、語りの豊かさを最大限取り入れるべく、まずは KH Coder の分析で再現可能な形で結果を出し、その考察にあたってインタビューデータを参照する方法とした。

具体的にはまず、分析対象のデータに対し、意味をなさない語句を強制排除語（「あ」、「なんか」

など)として削除した。次に、まとまりとして抽出したい語句(「気になる子」,「発達支援室」など)を強制抽出語として抽出した。さらに、共通した意味を示す語句を類似語として指定する手続きを行った(「お母さん」,「お父さん」,「お家の人」,「両親」,「ママ」,「パパ」などを「保護者」に指定)。次に保育者のインタビューデータ総抽出語 15,726 語のうち,4,790 語を使用し,分析単位を段落に設定して共起ネットワーク分析とクラスター分析を行った。同様の分析を管理職のインタビューデータ総抽出語 17,069 語のうち 5,519 語を使用して行った。

さらに保育者と管理職のインタビューデータを統合し職種による違いや心理職が在籍する園とそうでない園による違いについて分析を行った。分析対象のデータに上述の保育士と管理職それぞれのデータと同じ方法で,強制排除語,強制抽出語,類似語を指定して抽出する手続きを行った。その上で,総抽出語 32,633 語のうち 10,163 語を使用し,分析単位を段落に設定して層化共起ネットワーク分析と対応分析を行った。

なお,分析結果の記載およびその考察の際には,上述の各分析によって抽出された語を含むインタビューデータを確認し,筆者間の合議により代表的な内容と判断したインタビューデータを適宜参照した。

3. 結果

3.1. 保育士のインタビューデータ

保育士のインタビューデータに関し,抽出語の最小出現回数を 10 回,上位 60 語に設定して共起ネットワーク図を描き(図 1),ついで階層的クラスター分析(ユークリッド距離, Ward 法)を行い,インタビューデータの中に出現した語のまとまり方を検討した。その結果,8 つのクラスターが抽出された(表 1)。

次に各クラスターに含まれる抽出語とクラスター名を示す。本文中「**ゴシック体**」はクラスター名,[]は抽出語,“ ”はインタビューデータを表す。

なお,インタビューデータはプライバシーに配慮し,内容の本質を損なわない範囲で表現を修正している。

クラスター1 は[大人],[保育],[行う],[日々],

[時間]の 5 つの抽出語から構成されていた。

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ,“日々の保育の中で,複数担任で行っているの、うちの園の場合,早番遅番で,個別対応する大人と,クラスをリードする大人とっていうふうに,日々を行っております”,“日々の保育する中で,例えば自分しかいない時間帯保育の間で,その子のことも援助してあげなきゃいけないけれども,全体も見えていかなきゃいけないってところでは,どうしても全体を優先してしまうので,できるだけ危険のないように,保育はしないとはいけないなと思って気をつけてはいるんですけど,そういう場面では,ちょっと大変さも感じつつ”のように基本的に複数の保育士で「気になる子」の保育をして工夫していることと共に,その人手が足りない時の大変さも語られていた。

また,“担任だけの目ではなくて,心理のカウンセラーもいますし,あとは,園長,主任だったり,ほかのクラスの大人も,そのお子さんを,みんなで見えていくっていう姿勢で保育を行っていますので,情報共有しながらだったり,アドバイスいただいたり,色々みんなと話しながら行っています”のように保育士間や管理職と保育士など,スタッフ間で役割分担をしつつ情報共有をしながら,園全体で子どもを保育していることが語られていた。そこでクラスター1 を「**園全体での保育と日々の情報共有**」と命名した。

クラスター2 は[関係],[他の子],[自分],[持つ],[機会],[一緒],[作る]の 7 つの抽出語から構成されていた。

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ,“(気になる子について)その子もやっぱり個別にお友達と遊ぶ機会とか,私(保育士)が遊びに行ってお友達たちと一緒に遊ぶ機会とかっていうのを設けながら,だんだん少し心がほぐれていって,友達関係が作られていたっていうようなところがあったので.やっぱり大きい集団だけでなんとかしようっていうのは,ちょっと,やっぱりハードルが高いんじゃないかなって,その時すごく感じましたね”,“(気になる子に対し)言語化してあげて,それでじゃあどんな遊びをしているのかなっていうところで,会話をちょっと含めながら,他の子たちもそうする

と会話をどんどん広げていくので、それで同年代の子たちの言語でのコミュニケーションではちょっと追いつけない部分があるので、そこはちょっと噛み砕きながら、順を追いつつながらというか、で、ちょっとこう話してあげることで理解はできるので、知的には低くはないのかもしれないんですけども、そこで理解して入っていくことはできるとい状態ですね”，“あとはもう一点は、大人も入りながら、ちょっとずついろんなものを一緒に作っていく楽しさっていうところをやっぱり経験を積んできたことで、他の子たちとも作るっていう楽しさが徐々にわかってきているのかなと思います”のように、気になる子が集団場面で他の子と関係を持つ際に困難が生じることがあるが、他の子との接点を作ることで子どもの対人スキルを育てる工夫をしている内容だったため、クラスター2を「**子どもの対人スキルを育てる工夫**」と命名した。

クラスター3は[周り]、[気]、[親御]、[子ども]、[本人]、[困る]、[多い]、[人]、[その子]、[園]、[集団]、[生活]の12の抽出語から構成されていた。

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ，“やはり輪に入って行きたいけども、輪の入り方がちょっと不器用というか、どうやって入って行ったらいいのかとか、入っていった中でお互いに心地よい関係で遊んでいくことが苦手であったりとか、本人の中でどうしたらいいかわからないし、あと周りがそれに対して困っているとか、周りが不快な思いをしたということに対しての気づきっていうのもちょっと弱いお子さんなんで、周りが怒っていても、本人にとっては多分悪気はないんですよ”，“私がどちらかと言うと気になるのが、その子の評価が周りの子どもたちから下がってしまわないかどうかというところがとても気になるっていうか、そこをすごく気をつけたいところで。例えば年長になるとその、他の子たちの目も育って来てるので、あの子はできていないとかできているとか、いつもこれをやっていないとか、いつもこれが遅いとかそういうことがすごく周りの子どもたちが気がつくっていうか、見えてきてしまうんですよ”のように「気になる子」に対する他の子どもたちの反応、特に困り感や否定的な評価への懸念が語られていた。

あるいは“また、基本的生活習慣の未熟さだったりっていうところも、気になっていまして、集団活動への参加というところが、苦手なお子さんが増えてきているかなというふうに感じています”，“コミュニケーションの部分の力っていうのが、弱くなってきてるお子さんも多く感じているのに、衝動的に手が出やすいとか、言葉よりも先に手が出ちゃう、足が出ちゃうっていうお子さんはやっぱりまだまだ多いので、その部分で相手を傷つけないようにだとか、自分も傷つかないように支援だったりも、日々意識して気をつけてもらっています”のように、保育士の視点から、「気になる子」にとって園生活で苦手なこと、課題と思われることが語られていた。

クラスター3は実質2つの部分から構成されていて、前者は「気になる子」に対する他の子どもたちの反応であり、後者は「気になる子」にとって苦手なことなどであったので「**コミュニケーションが苦手な子どもと他児の反応**」と命名した。

クラスター4は[声]、[状況]、[一番]、[入る]、[伝える]、[話す]の6つの抽出語から構成されていた。

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ，“（気になる子にとって）やっぱり一番苦手なのは、リアルタイムで流れている、変化していく状況を多分掴んでいきながらそれにこう対応していくっていうところが苦手なかなって思うので、その都度その都度声をかけてあげたり。同年代の男の子たちだと、どうしてもちょっとついていけない部分があるみたいなので、今はどっちかというと、年下の子と関わっていることの方が多いですね”，“気になるかなっていうぐらいであると意外と園でよくあるのが、一対一だといろんなことがうまく行くけども、一対多数とかになると途端にそこで指示が入らなくなるとか、そういうケースもあるので、その見極めであったりとか”，“言葉だけの指示だったり、いっせいでの指示だと、理解が難しいというお子さんには、個別に声をかけることも行いますし、耳から入る情報よりも視覚的に入る情報が入りやすいお子さんもいるので、写真だったりカードを用意して、そういうものを使って伝えるようにすることも多くなっております”のように、保育場面において気になる子にとって苦手な集団場面などの複雑な状況の把握を支援するために保育者と

してどのような声掛けをしているか、といった保育上の工夫について語られていた。そこでクラスター4を「**気になる子への声掛けの工夫**」と命名した。

クラスター5は[支援], [気になる子], [専門], [必要], [気になる], [この子], [心理], [職員], [療育], [お子さん], [対応]の6つの抽出語から構成されていた。

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ、“一人で抱え込んで、気になる子だったり、診断名がついているお子さんなどの対応が、ちょっとどうしたらいいんだろうってなってしまうかと思うんですけれども、もう本当に園全体で、まあ、栄養士、看護師、児童、園長、主任、私たちも日々研修に、ハンデのあるお子さんの研修に参加させていただいたら、どうしたらいいか、心理カウンセラーと思うんですけれども、みんなで、その子のことを知っていくということがあります”、“また、あとは市役所、町、健康センターとか、そういうところとの関係においても、以前より密接になれたのは、これは心理がいたからとかいうことではないんですが、かなりネットワークが充実してきているので、いろんな面で、繋がりが持てるようになったことで、じゃあどう繋がっていかうかっていうことが心理の職員と相談しながら、一歩二歩三歩と進んで、とりあえず今この子、どこかと繋がたいよねみたいな子があった場合にはまあ100%...、100%とは言わないですね、かなりの割合で保護者の方にも理解とかを一緒にできるようになってきたかなって思っています”のように、保育者に加え、多様な職種による専門的な支援が必要という語りが中心であった。そこで、クラスター5を「**多職種との協働**」と命名した。

クラスター6は[話], [聞く], [相談], [発達支援室], [クラス], [担任], [お母さん], [お話]の8つの抽出語から構成されていた。

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ、“担任が困っちゃってる時、こういうときどうしてあげたらいいんだろうとかって思う時があって、ちょっと専門の先生のアドバイスもらいたいなあっていう時に、お母さんにちょっと（発達支援室などで）聞いてきてくださって言うて聞いてきてもらうっていうこともあ

ります”、“A市だと発達支援室にちょっと相談してみましようかという風になるんですけど、なんとも、はっきりしたことが言えないっていうか、そういったところがあるので、で、発達支援室にとかっていうとすごく時間がかかっていくんですよ”のように発達支援室へリファーし、保護者を通じて子どもの支援をすることと、その支援室に繋がるまでに時間がかかることが語られていた。

また、“なかなか自分が困っていることとかできないことを出しにくい性格のね、（担任の保育士の）先生とかもいたりとか、そういう場合もあるので、私はできるだけ、私も自分の困ったこととか失敗したこととかをどんどんそういう後輩とかいろんな人に言うようにして、で、お互いがそういうことを言いやすいようにしていますね”、“ただ割とここの園は、園長先生とかにもそういうことが割と相談しやすかったり話しやすかったりするのと、今割と同じ学年を持ってる担任が保育の経験が重なっている人たちが多いので、「どうしたらいいかしらね」みたいな事を少し気軽に聞いたりとか声かけたりすることもできているっていうのも現状だし”といった担任の保育士を園内でサポートする体制についての語りもあった。

クラスター6は実質2つの部分から構成されていて、前者は発達支援室利用の利点と保護者の受け止め方の違いによる繋がりにくさ、後者は担任同士の支え合いだったので「**発達支援室への繋ぎの困難さとピアサポート**」と命名した。

クラスター7は[保護者], [難しい], [共有], [少し]の4つの抽出語から構成されていた。

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ、“意外と家庭だと親御さんが気付いてないパターンも多く、「うちの子できてますよね」という風な感じで、その辺りを園での集団生活というあたりの視点で具体的に伝えてあげる必要があるのかなっていう部分も気になる子っていう部分ではそうですね”、“こんなことを今園で困ってるから、お家でも少し進めてみてもらえますかとか、お家でも個別にこんなことしてみてもらいたいかもしれないとかって、言えるのと言えないのだと全然違って、やっぱり家庭と一緒にその子の課題とか、その子が今取り組んでいることがわかってやれるのとやれないのじゃ全然違うので、だからやっぱり保護者と共有できてっていうのはすごいポイントなんですよ”。

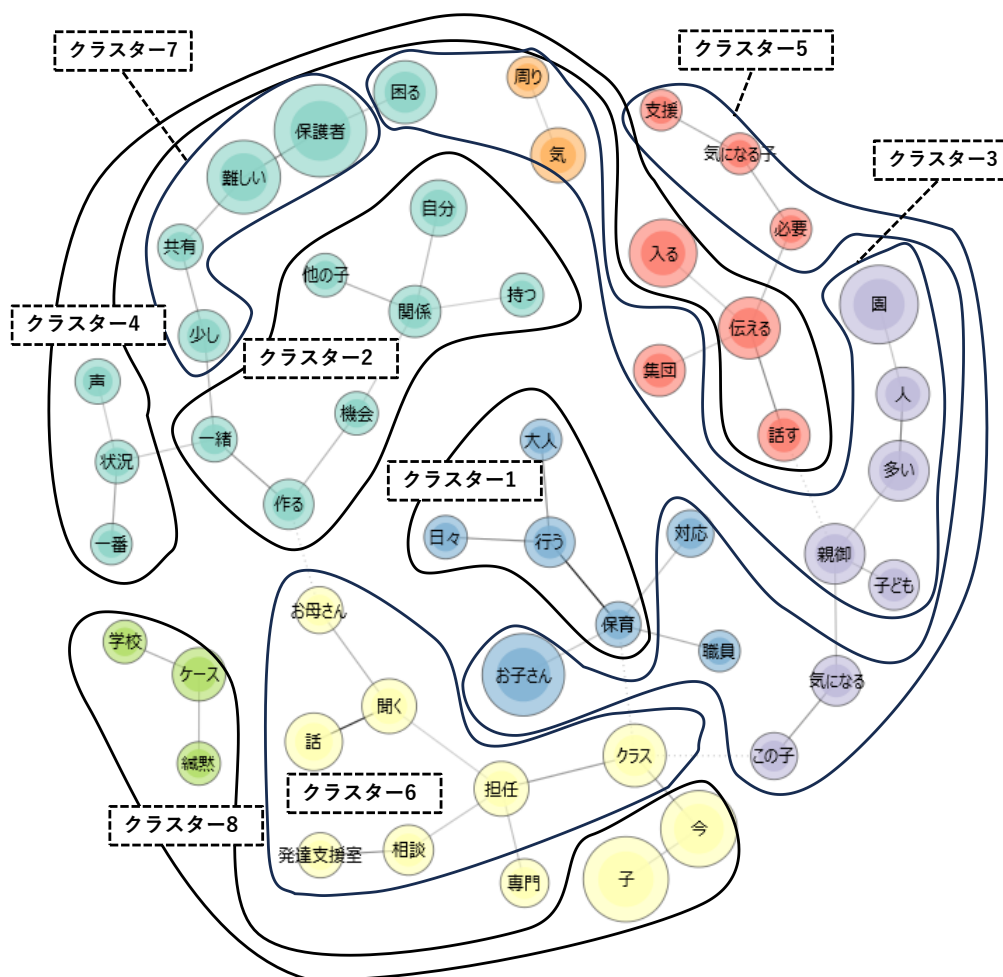


図 1. 気になる子に関する保育士のインタビューデータの共起ネットワーク図

表 1. 気になる子に関する保育士のインタビューデータの階層的クラスター

クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	クラスター5	クラスター6	クラスター7	クラスター8
園全体での保育と日々の情報共有	子どもの対人スキルを育てる工夫	コミュニケーションが苦手な子どもと他児の反応	気になる子への声掛けの工夫	多職種による協働	発達支援室への繋ぎの困難さとピアサポート	家族との情報共有の重要性と困難	子どもとの関わりに苦慮した体験と卒園後の心配
大人 保育 行う 日々 時間	関係 他の子 自分 持つ 機会 一緒 作る	周り 気 親御 子ども 本人 困る 多い 人 その子 園 集団 生活	声 状況 一番 入る 伝える 話す	支援 気になる子 専門 必要 気になる この子 心理 職員 療育 お子さん 対応	話 聞く 相談 発達支援室 クラス 担任 お母さん お話	保護者 難しい 共有 少し	ケース 学校 緘黙 今 子

そこがでも難しいところなんです。一番”，“働くお父さん，お母さんも大なり小なり子どもの気になる，発達があるかないかは別として，単純に子育てに悩まれている方とかもいらっしゃいますし，そういったところでのケアであったりとか，それは現場の私たちが本当は導いていけば一番いいと思うんですけども，やっぱり心理士さんっていう，一つの確立されたその役職といいますか，そういったものの方がいらっしゃるということはすごく親御さんにとってはあれですよ，励みになるというか，安心感にも繋がるのかなど”のように気になる子の園での様子を家族と共有することが重要であり，日々保育士として試みているものの，園での子どもの課題を伝えることが非常に難しいことでもあるとの語りだった．そこでクラスター7を「**家族との情報共有の重要性と困難**」と命名した．

クラスター8は[ケース]，[学校]，[緘黙]，[今]，[子]の5つの抽出語から構成されていた．

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ，“私がすごく難しかったのが緘黙の子です．緘黙も情緒（的部分で気になる子）に入りますか．緘黙の子はすごく難しかったです．（中略）もう入園した時からもうなんか泣きが全然おさまらない．行き渋りと泣きがもうすごく治まらない．一年間ほぼ行き渋りと泣きで登園して，そういう感じだったんですよ．やっぱり馴れるのにすごく時間がかかって，お話，園で全然できなくてっていう感じでしたね”，“とにかく現状を保護者の方と共有しながらやってたんですけど，保護者の方が，年長になってもあまり状況が変わらなかったんで，保護者の方が．私と園長の中では緘黙なんじゃないかねみたいになちょっと雰囲気は出たんです．もう年長入る前ぐらいから，で，ただちょっと私も緘黙のケース初めてだったので”，“卒園してから学校行って，ちょっとハードル上がっちゃってとかっていうのは，ちょっとどうしてあげたらよかったんだろうなあ，園にいるときなんかしてあげられることあったかなとかっていうので，ちょっとこう，卒園後のそういう話を聞くと，ああなんかどうにかしてあげられたのだからって思うことがありますね”のように，緘黙が疑われた子どもへの関わりに苦慮した体験談や，小学校に入学してからの困難を後

に聞いたエピソードであった．そこでクラスター8を「**子どもとの関わりに苦慮した体験と卒園後の心配**」と命名した．

3.2. 管理職のインタビューデータ

管理職のインタビューデータに関し，抽出語の最小出現回数を10回，上位60語に設定して共起ネットワーク図を描き（図2），ついで階層的クラスター分析（ユークリッド距離，Ward法）を行い，インタビューデータの中に出現した語のまとまり方を検討した．その結果，7つのクラスターが抽出された（表2）．

次に各クラスターに含まれる抽出語とクラスター名を示す．なお本文中「**ゴシック体**」はクラスター名，[]は抽出語，“ ”は発話内容を表す．

クラスター1は[園]，[相談]，[発達支援室]，[A市]の4つの抽出語から構成されていた．

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ，“園の中で，どうしてもならなくて，園だけで考えていたら，多分どうにもならないことがあると思うんですが，できるだけすみやかにA市のある，公共のまあ，専門のところですね，のところに相談をするようにしているので，あまり抱えきれないっていうことになる前に，問題が大きくなる前に，相談をするっていう，その辺のこうフットワークの軽さっていうか，もうこれは長年，私がこのA市で仕事をしているので，人間関係ができていたりですとか，そういった強みもあるだろうと思いますが，やっぱりそういったことを，ですかね”，“それはもちろんあって，答えが全然でないで堂々巡りしてその会が終わっちゃう時ももちろんありますし，今はそれが地域の発達支援室や民間の療育センターの方々への相談で何とか解決しているっていう感じで，園内で解決するって難しいって感じることもの方が多いです”のように管理職としてA市の児童発達支援施設との連携を行っていることに関する語りであったので，クラスター1を「**発達支援室との連携**」と命名した．

クラスター2は[心理]，[職員]，[保育]，[一緒]，[専門]，[持つ]，[課題]，[関係]の8つの抽出語から構成されていた．

クラスターの語が現れているインタビューデー

タを参照したところ，“園の職員がおりまして、保育士の資格も持ちつつ、公認心理師がおりますので、その職員とともに、まあクラスの担任がその子の育ちについて相談する機会であったりとか、それはもちろん、普通にね、私も同じなんですけど、ここで一緒に相談しながら、どう、社会と繋がったりとか、公の機関ですね、A市とどういう風に繋がっていかうとか、あとは、保護者にどう伝えていったらいいのかっていうような相談を進めて、日々保育しているという感じです”のように園の組織内に心理職がいてとても助かっているという語りがあり、また、“発達支援室に、予約を取ってというか、連絡をして、まあ、何か月後とかにくるっていうような仕組みになっているんですが、もしですね、その例えば、その園にまあ常勤じゃないにしても、発達心理の方が、まあ日常の子どもの様子も見て、そして評価もできるっていう方がいらっしゃったら、それは非常に心強いところで、ワンストップでできる。園内にいながら”など、心理職がいなくて身近にいて欲しいという希望が語られていた。そこでクラスター2を「**園内の心理職の必要性**」と命名した。

クラスター3は[小学校]、[保育士]、[今]、[勉強]、[保育園]の5つの抽出語から構成されていた。

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ、“この話であっているかわからないですけど、小学校の先生との関わりっていうのを、これもA市全体で増やしていこうっていう取り組みがあってありがたく思っているんですけど、小学校の先生とコミュニケーションをとる場がもっと増えていいなってすごく思っていて、今も年2回くらい一緒に勉強会をする機会をもって、A市が企ててくれているんですけど、もっと日常的に小学校の先生が保育園に見に来たり、保育士が学校の授業を見に行ったりみたいなのがもっと気軽にやり取りできればいいのになって思っています”、“小学校ともっと連携できたらいいいのになっていうのは日々思っていることです。ただ、学校の先生もすごく忙しいじゃないですか、保育士以上に、だからなかなかそういう時間を持つのが難しいなあと思いながら、思っています。それはずっと”のように幼稚園、保育園、認定こども園と小学校との連携の必要性和実務上の困難に関する語りが中心であった。そこでクラ

スター3を「**幼保小連携の課題**」と命名した。

クラスター4は[場面]、[共有]、[ご家庭]、[訪問]、[考える]、[難しい]、[気になる子]、[保護者]、[子ども]、[集団]の10の抽出語から構成されていた。

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ、“保護者の方が見ているお子さんの姿と私たちが集団の中で見ている姿は、ちょっと異なるので、全く同じではないっていう視点を持ちながら、子ども本人が集団の中で、こういったところがちょっと困っているようだ、だから私たちはサポートをしたいんだけど、お母さんどうですかねとか、お父さんどうですかねっていうような、視点でいるようにしています”、“子どもが切り替えが難しいんだなあっていう実態をそういった形で、お母さんにお伝えをすると、そういった迷惑かけてるとかっていうことではなく、うちではこうしてますよとか、うちでも実はその切り替えが難しく困ってたんですとかっていうことになると、共有部分が出てくるので、そうなんです。じゃあどうしていきましょうか？一緒に考えようっていう風に、持っていかれるので、まずお子さんをとにかく、私たちの保育もいつも子どもを否定する保育はしていないので、その実態、お話をして、まずはそこから気をつけています”のように子どもが園にいるときと家庭にいるときの場面について保護者と情報共有することの重要性について語られていた。そこでクラスター4を「**園・家庭間の子どもの情報共有**」と命名した。

クラスター5は[気持ち]、[聞く]、[先生]、[話]、[入る]、[言葉]、[大人]、[手]、[自分]、[困る]、[療育センター]、[担任]、[人]の13の抽出語から構成されていた。

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ、“この保育園だけが頑張ってるんじゃないくて、A市全体で取り組んでいて、みんなで保育の質をあげようじゃないかっていう取り組みがすごく積極的に行われているのが、今、A市の保育協議会って言って、私立保育園の園がみんな入ってる会なんですけど、ハンディキャップについてだけじゃなくて、保育についても高めようっていうことで、各園の見学をしあったりとか、保育の、それはちょっとコロナ禍で今ストッ

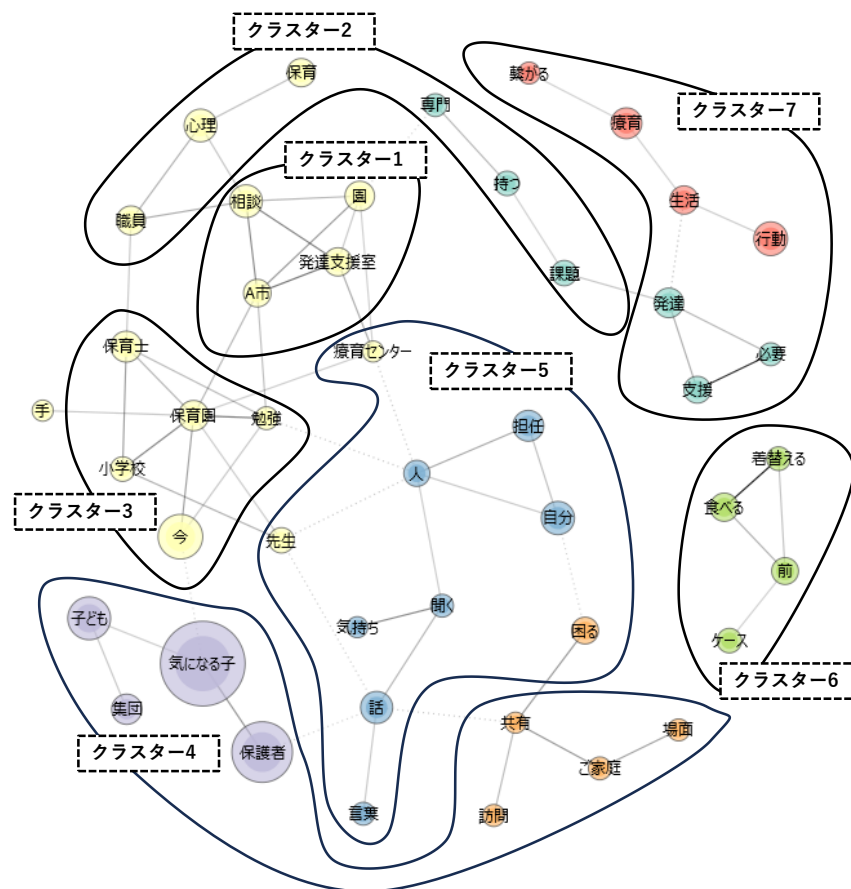


図 2. 気になる子に関する管理職のインタビューデータの共起ネットワーク図

表 2. 気になる子に関する管理職のインタビューデータの階層的クラスター

クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	クラスター5	クラスター6	クラスター7
発達支援室との連携	園内の心理職の必要性	幼保小連携の課題	園・家庭間の子どもの情報共有	多職種連携によるサポート	心理アセスメントに繋げたいケース	療育との連携による発達支援
園 相談 発達支援室 A市	心理 職員 保育 一緒 専門 持つ 課題 関係	小学校 保育士 今 勉強 保育園	場面 共有 ご家庭 訪問 考える 難しい 気になる子 保護者 子ども 集団	気持ち 聞く 先生 話 入る 言葉 大人 手 自分 困る 療育センター 担任 人	食べる 着替える ケース 前	支援 必要 行動 発達 生活 多い 療育 繋がる

プしちゃったんですけど、あと指標になるものをつくらうって言って、外国から取り入れたものなだけけど保育環境スケールいう、保育ってなんか測れるものがないんですよ、(中略)その物差しに対して自分たちの保育はどうかっていうのをチェックする機能を、あるいは一生懸命勉強して取り入れてたりとか、A市全体がそんな雰囲気であり、ありがたいです、本当に“、担任の先生たちの心理的な負担がすごく大きくなって、この二学期以降になってくると子どもが育ってきて、随分変わるんですけども、やっぱり若い先生たちは、大変な今に押しつぶされそうになっていくので、そういった時にちょっとこう、子どものことも共感ができる、見てくれている人がこう、なんででしょうね、寄り添ってもらったりすると、話を聞いてもらえると、非常にこう気持ちが、解決を期待しているわけではないと思うんですね。その子どもたちがすぐ、昨日はやっぱりこうで明日こんなに変わるってことはありえないんだけど、自分の思いをこうちょっと荷を一つ持っててねって、ちょっと持ってもらえるっていうか、そんな存在が多ければ多いほど、多分いいんだと思います”、“発達支援室も、就学相談にかかったお子さんとか、お母さん自身がこれも自分の親御さんの意志で発達支援室にかかったら、支援室から見に来るっていう感じなので、園からお願いできるのはその療育センターの巡回相談だけですかね、それはこちらからお願いできて、ですけどそれは人数制限があるんです、年間何人まで。まあ、療育センターもすごく忙しい。そうですね、だから本当に、どうなんだろう、そういう機関がもっと増えない限り無理なのかとか、今、療育センターと発達支援室くらいしかないのA市も。それかそうですね、そういう機関が増えるもしくはそういう心理職の人が園を回ってくれるみたいなシステムができないか、しかないですよ”のように管理者からすると担任と他の保育士のピアサポートだけでなく、療育センターのさまざまな専門職による相談支援によって、多職種で子どもを支援していく体制について語られていた。そこでクラスター5を「**多職種による協働**」と命名した。

クラスター6は[食べる]、[着替える]、[ケース]、[前]の4つの抽出語から構成されていた。

クラスターの語が現れているインタビューデー

タを参照したところ、“すでに所属があって、発見が早いお子さんと、そうではなくって、ご家庭でいる中で気づかれなくて、ある程度の年齢まで来てしまうっていうケースが、目立ってきていると思っていて、その深刻さというか、集団生活をしていないお子さんが抱えている、課題っていうのは、ちょっと深刻だと思っているんですね。なので、そういった所でも、やはり速やかに専門領域につなげるためには、心理の方がもっと身近にいて、その方々と支援を共にしながら、タッグを組みながら、強力に、今以上に強力に何かサポートをできるっていう体制が整うことが、やはり必要だなという風に感じています”、“まさにその見立てというところですね。前のケースのエピソードの中で、療育が必要ではないかもしれないけれども、何か食べちゃうとかジャンパー食べちゃうとか、そのお子さんが、知的な遅れでこういう状況なのか、それとも情緒のところなのか、注目欲求が強くてなのか、認知なのかっていう、その辺りは私たちは手探りでやるしかないんですね。手探りでやりながら、なんとなくこれかなって思うところを見つけ出して、そこをこう引っ張ってきて、何とか今に至ってるっていう状況です。これが例えば、心理の方、専門の方が見て、そして見立てをする、あるいは場合によってもその評価、アセスメントをとるっていう事で、もっと明確にそのお子さんの持っている課題や問題がわかったら、もう少し素早く対応ができるんじゃないかと”のように、保育者が気になる子どもの園での生活、特に、基本的な生活習慣の確立に関して困っていたことについて、管理職の視点から語られていた。そこでクラスター6を「**心理アセスメントに繋げたいケース**」と命名した。

クラスター7は[支援]、[必要]、[行動]、[発達]、[生活]、[多い]、[療育]、[繋がる]の8つの抽出語から構成されていた。

クラスターの語が現れているインタビューデータを参照したところ、“その子がすごく良くできたこととか、良い行動を褒めるっていうのも自分では意識してかな、あとすごく良くできた時に、これは私自身の考えじゃなくて助けてもらったその発達支援室の心理士さんとか、地域の民間の療育センターがあるじゃないですか、そこから色々そのお子さん見に来てくれて、こういう関わり方

するといいですよっていうアドバイスをいただく機会があったんですけど、やっぱりちょっとしたご褒美的なことをちゃんと形に見えて目に見えるような形でしてあげるとすごくモチベーションになるっていうことを聞いて、とても素晴らしい行動ができた時には、それはその子によったんですけど、シール、シール帳にシールをあげるっていうのとか、すごいね、抱っこしてぐるぐる回してあげるっていうのがすごい好きだった子がいて（中略）抱っこしてぐるぐる回してあげたりとか、そういうなんか本当ご褒美的な行動、ことをしてあげてたなと思って”、“その後、聞き取りを、障害者からの聞き取りをし、心理の、A市の心理の担当者が園にきて、子どもの集団の様子を見る。そしてまたそのフィードバックを保護者にし、その結果、じゃあ療育（センター）に行って、療育に、行った方がいいねとか、そういったところまで、やってくださると、発達支援室は小学校、中学校に上がってまでいろいろなかたちでサポートができるので、そういったところでは長く繋がれる、保護者が相談ができる場所として、有効じゃないかと思って、ご紹介します”のようにA市にある療育センターの心理職によるコンサルテーションや、療育センターにリファーすることに関する語りが中心であった。そこでクラスター7を「療育との連携による発達支援」と命名した。

3.3. 保育士と管理職を統合したデータ

保育士と管理職を統合したインタビューデータに関し、分析単位は段落、抽出語の最小出現回数を15回、上位60語に設定して共起ネットワーク図を描いた。その際に職種（保育士・管理職）を外部変数とする層化を行った（図3）。

層化共起ネットワークにおいて、保育士に特徴的な語として[気]、[専門]、[行う]、[ケース]、[伝える]、[気になる]、[場合]、[話す]、[クラス]、[入る]、[一緒]、[聞く]、[感じ]が得られた。保育士は担当するクラスや個々の気になるケースへの直接的な対応に関する語が多く抽出された。

一方、管理職に特徴的な語として[課題]、[発達]、[本当に]、[保育士]、[良い]、[職員]、[支援]、[発達支援室]、[保育園]、[行動]、[心理]、[食べる]が得られた。管理職は、園で働く職員や園外の相談資源に関する語が多く抽出された。

保育士と管理職に共通する特徴語として[療育]、

[関係]、[園]、[相談]、[人]、[多い]、[自分]、[担任]、[話]、[その子]、[生活]、[保護者]、[子]、[今]、[難しい]、[集団]、[子ども]、[困る]が抽出された。保護者への対応や子どもの困難とその対応に関する語が多く抽出された。

さらに管理職や保育士といった職種によるインタビューデータの特徴と園内に心理職がいるかどうかによるインタビューデータの特徴を検討するために対応分析を行った。具体的には統合したデータに対し、分析単位は段落、抽出語の最小出現回数を15回、上位60語に設定し、職種（管理職・保育士）と園内の心理職の有無（心理職有・心理職無）を外部変数として対応分析を行った（図4）。成分1は40.12%、成分2は59.88%、累積寄与率は100%であった。

図4全体を見ると、原点付近に[保護者]が配置され、横軸には左から[緘黙]、[ケース]、[子]、[クラス]など子どもを示す語が配置され、右には[先生]、[保育士]、[心理]、[職員]など子どもの支援者が配置されていた。つまり子どもと支援者の軸であり、中間に保護者が位置づけられた。縦軸には、下から[日々]、[伝える]、[対応]、[コミュニケーション]など保育士による日常的な子どもとの関わりを示す語が配置され、上には[専門]、[発達支援室]、[療育]、[支援]、[A市]など園外の専門機関による子どもへの支援を示す語が配置されていた。つまり、園内における気になる子への日常的支援と、園外における専門支援を分ける軸と考えられた。

職種による違いを見ると、保育士は第3象限にあり、[声]、[クラス]、[気になる]など保育士の担当クラスで日常的な子どもとの関わりを示す語が特徴的な語として配置されていた。一方の管理職は第1象限にあり、[小学校]、[A市]、[保育士]、[先生]など子どもの支援者や園外の専門機関が特徴的な語として配置されていた。

園内心理職の有無による違いを見ると、心理職無は第2象限にあり、[ケース]、[支援]、[発達支援室]、[専門]など園外の専門機関による子どもへの専門的支援に関する語が特徴的な語として配置されていた。一方の心理職有は第4象限にあり、[コミュニケーション]、[対応]、[増える]、[心理]、[職員]など園内の多職種による日常的な子どもの支援に関する語が特徴的な語として配置されていた。

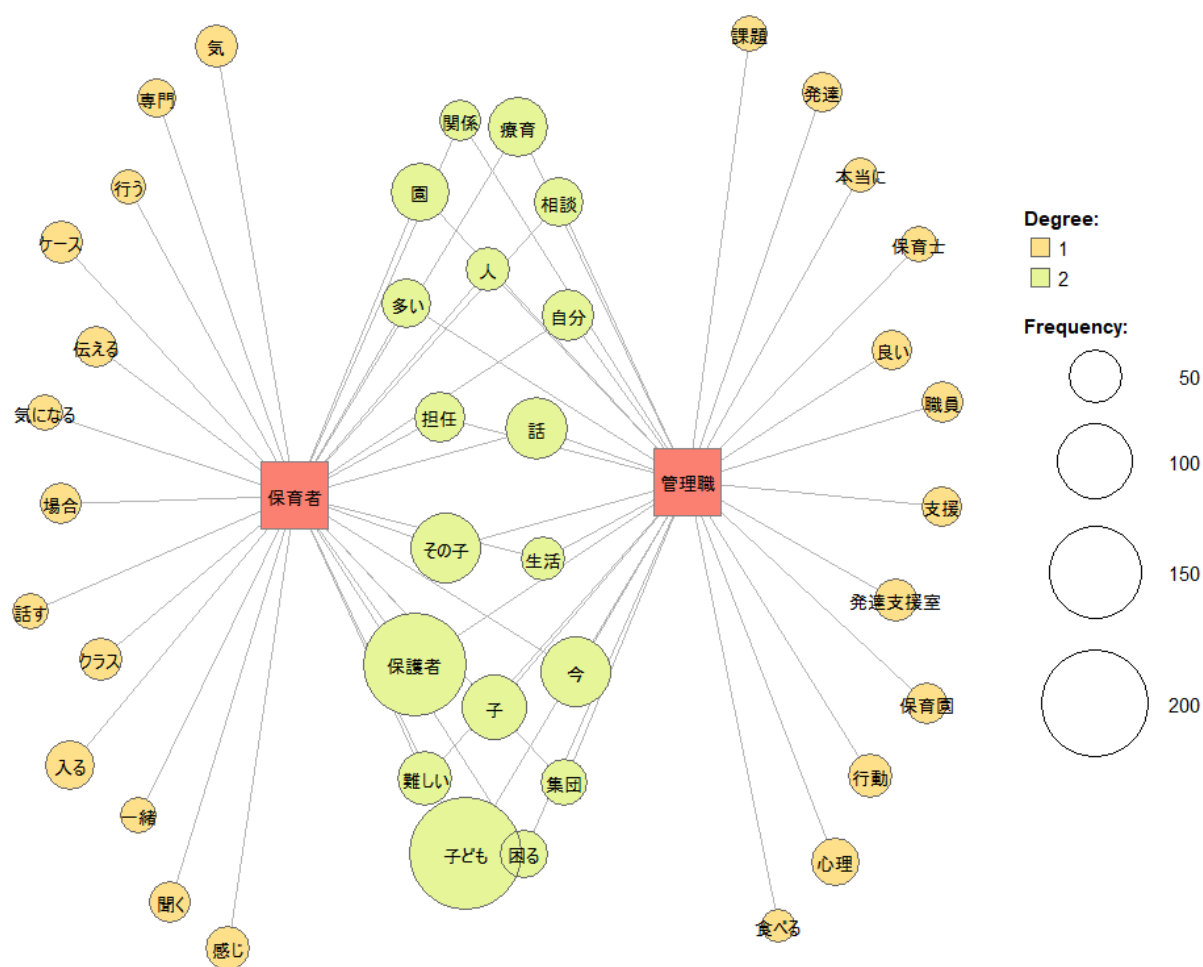


図3. 気になる子に関する保育者・管理職のインタビューデータの層化共起ネットワーク図

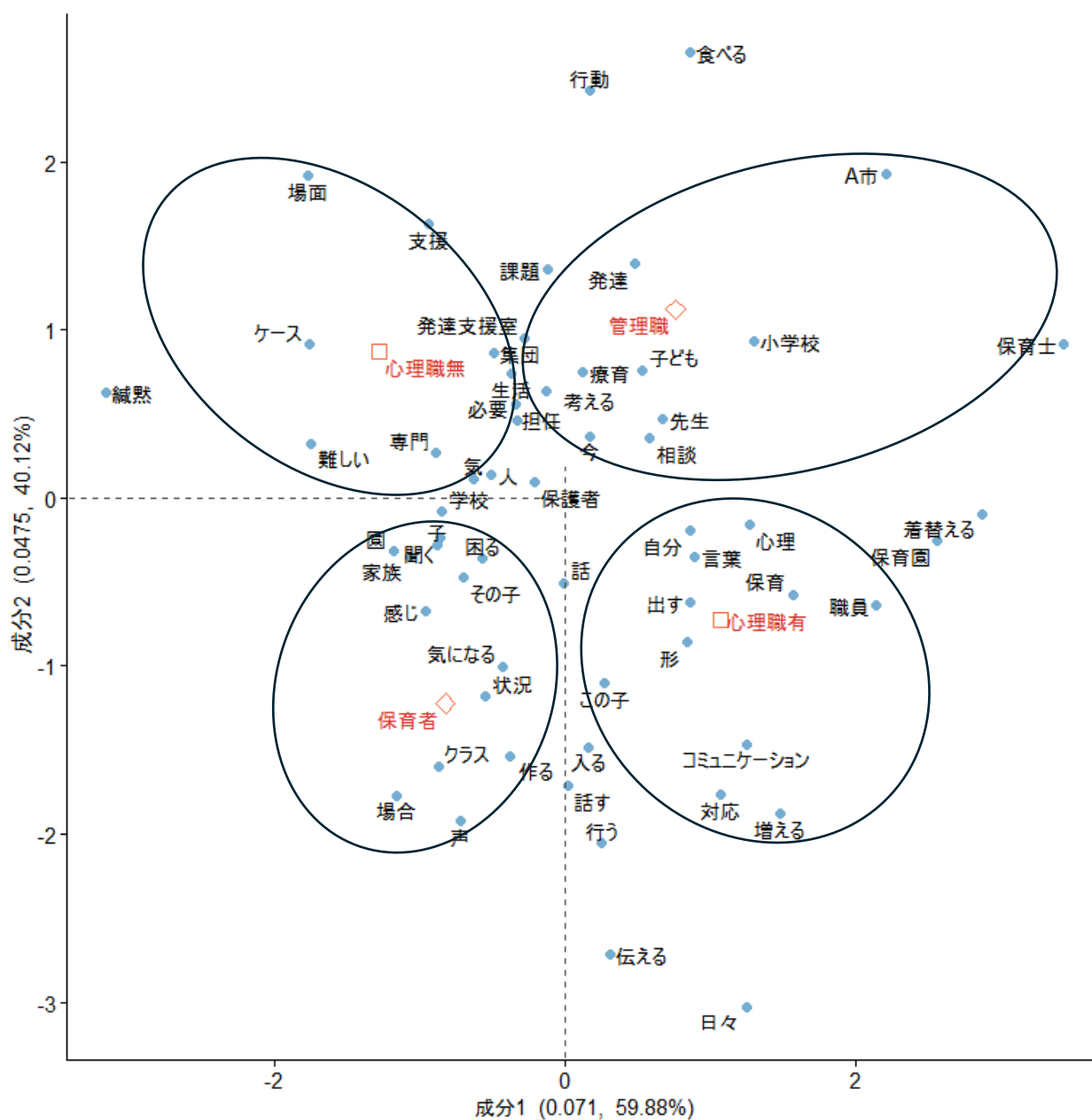


図 4. 気になる子に関する保育士・管理職のインタビューデータと心理職の有無の対応分析

4. 考察

4.1. 「気になる子」に対する関わりの実態

インタビューを通じてそれぞれ語られた「気になる子」の定義は、予想していたようにやはり一様ではなかった。発達障害と診断されている子どもや、診断には至らないが発達の偏りを思わせる子どもが話題に挙がるが多かった一方、基本的生活習慣が未熟であったり、家庭内では特に気になる様子を呈さない、あるいは同年代の子どもたちとのコミュニケーションにはついていけないが年下の子どものとは遊べる、など必ずしも発達障害と直結しないような特徴を持つ子どものエピソードも語られていた（以下、生成されたクラスターを示す場合には、管理職を【管】、所属の保育士を【保】、またクラスター1を【Clu.1】などと略記する）。

そして6名のインタビュー結果からまず明らかになったのは、保育者たちが「気になる子」との関わりを現場でどのように体験してきたかについての実際的な様相であった。

「気になる子」へ関わる上での具体的な工夫としては、他児との交流が少ないことが「気になる子」に対して、保育者が他児とのコミュニケーションを図れるような機会を設けたり、声かけによる促しを行うことなどが語られた。たとえば大集団の活動ではなく、他の子どもと個別に遊べるような機会を設けることや、子どもの思いを保育者が代わりに言語化することで、他児との言語的コミュニケーションを促進すること、などが挙げられていた【保 Clu.2】。さらに、場に応じて臨機応変に状況を掴むのが苦手な点が「気になる子」に対しては、その都度保育者が声かけをして、その子どもが状況に応じた動きができるように支援するための関わりが行なわれていた【保 Clu.4】。

野村⁶⁾は、保育者の多くは自身の経験から、子どもが集団に関わりながら育つことの重要性をよく知るゆえに、「気になる子」もできる限り集団の中で育ちあう保育がしたいと願うものであると指摘している。インタビューからは、その「集団の中で育ちあう保育」を目指そうとする保育者の気持ちと、そのための努力の様相が読み取れた。

加えて、園内だけでの支援が難しい場合、特に発達障害の影響が想定される子どもへの支援については、地域の発達支援室や民間の療育センターによる専門的心理支援が既に一定程度機能してい

ることがみてとれた。担任が関わりに困った時には、保護者に対して地域の発達支援室を訪ねてみるよう促す対応も行われていた【保 Clu.5】。

さらに重要と思われたのが、担任らが関わりの中で抱いた困り感をひとりで抱え込むのではなく、園全体のチームで共有することで解決を図っていた点である。インタビューでは、後輩の保育士に自身の失敗経験を話したり、保育経験年数が近い同僚保育士と気軽に声をかけ合ったり、園長にも相談しやすい雰囲気が醸成されているなど、スタッフ内で助け合う体制が築かれていることが語られていた【保 Clu.6】。さらに管理職のインタビューでは、担任の困り感が一人で抱えきれないほど大きくなる前に、フットワークよく地域の支援機関に相談することの大切さが語られていた【管 Clu.1】。

そして以上のような所属の保育士および管理職へのインタビュー結果から、両者が果たしている役割の色合いの違いも明らかになってきた。所属の保育士は【保 Clu.1~4】や層化共起ネットワーク図（図3）、対応分析結果（図4）などを見るとわかるように、日常の保育の仕事において様々なことに悩みつつも、工夫を凝らしてその対応を試みる姿勢が特徴的であった。また【保 Clu.5~7】からは、多職種との連携や保護者らとの丁寧なコミュニケーションに注力することで、「気になる子」に関連する保育者たちの困り感の解消を目指そうとする真摯な努力が見てとれた。

一方の管理職については【管 Clu.1, 5, 7】や層化共起ネットワーク図（図3）、対応分析結果（図4）などに見られるように、園の「気になる子」に関連する課題に対して、地域での連携を重要視する点は所属の保育士と共通していた。ただし、管理職は実際の連携をマネジメントする連絡調整を担うことが多いことが特徴的であり、そこからは長年の経験によって培われた視野の広さもうかがえた。管理職は経験の蓄積を通じて構築された地域のネットワーク力を活かし、必要に応じて迅速に連携を進めることで、所属の保育士が適切な助けを得られるよう気を配っていると考えられた。所属の保育士の困り感や心理状態にまで注意を払いながら、それをどうサポートするかに言及している点も、管理職ならではの視点であるといえるだろう。

4.2. 「気になる子」との関わりを通じて体験された困り感

そしてインタビュー結果をさらに読み解くと、「気になる子」の保育において保育者が体験している困り感が改めて見えてくる。

第一に挙げられるのが、子ども本人に直接関わる場面での保育者の体験である。たとえば、「行き渋りと泣きがずっとおさまらない」という子どもとの関わりに苦慮したケースについての語りがあった【保 Clu.8】。その保育者は、緘黙と思われる子どもとの関わりが初めてであったという。そこでの語りからは、子どもの理解と支援のあり方が見えにくい中での迷いや葛藤が見てとれた。

また、発達支援が必要と考えられる「気になる子」に対しての管理職の語りでは、入園する前に家庭内で過ごす期間が長かったために、発達支援の必要性に対する保護者や周囲の大人の気づきが遅くなった場合には、事態がより深刻になりやすいとの示唆もあった。そのような時には、知的な遅れなのか、発達や情緒的な面に何かあるのか、あるいは注目欲求なのか、といった部分で専門的な見立てが難しく支援が手探りになってしまう難しさがあるという【管 Clu.6】。

さらに一対一のコミュニケーションであればうまく出来るが、一対多数になると「途端にそこで指示が入らなくなる」といった「気になる子」に対しては、その傾向をふまえた場面づくりと関わりが試みられていた【保 Clu.4】。しかし、そこには限界もある。所属の保育士が「自分しかいない時間帯保育の時間」などでは、「気になる子」を優先することはままならず、子どもたち全体を見て、安全確保を第一にしなければならない【保 Clu.1】などの現実的制約が、実際にはつきまとうからである。

第二に、「気になる子」の保護者に関わるなかでの困難が挙げられる。保育者側が「気になる子」の様相に懸念を抱いても、そのことに関するとらえ方について保護者と隔たりがあったり、懸念を伝えることにためらいが生じたりすることがあるという【保 Clu.7】。

そこでは、子どもの気になる点とその実際の様相について保護者と共有できることは重要なポイントであるが、それが同時に最も難しいことでもある、という保育者側の切実な思いが語られていた。多くの場合、保育者は発達特性のアセスメン

トの専門家ではないため、そのような時に保護者に対して何らかの見解を提示することにためらいが生じることは、やむを得ないように思われる。

第三に、自治体の発達支援室などの外部リソースにつなぐ時に生じうる困難がある。保育者側としては、発達支援室などとの連携の必要性が頭をよぎったときでも、自身のみでは「はっきりしたことが言えない」という状況で判断を迷い、結局時間がかかってしまうこともあるという【保 Clu.6】。

加えて、自治体による「障害児（者）地域療育等支援事業」においては年間の相談人数の制限があったりすることなどから、支援のニーズが必ずしも満たされない実態もうかがえた【管 Clu.5】。

第四に、保育者の基本的な労働環境としての、日常業務の多忙さや労力の大きさがある。一般にも多くの保育者は、少ない人員で多くの子どもの保育を担っているため常に忙しく、かつ子どもたちの健康や命に対する大きな責任も伴う状況に日々置かれている。そのなかで、丁寧な配慮や気遣いが求められる「気になる子」と出会った際に、常にその子どもの様子や変化に気づき適切に関わることは、非常に困難があるように思われる。インタビューでは所属の保育士が自身のメンタルケアに困難を抱えたり、困った時に弱みを見せられなかったりする場合の心配も語られていた【保 Clu.6 および管 Clu.5】。

4.3. 心理職の貢献可能性

以上、インタビューから読み取れた「気になる子」に関連して保育者が体験した困難を四つ挙げた。それぞれを確かめながら、心理職の貢献可能性について考えてみたい。

まず「気になる子」本人との関わりについていえば、前節で示したように、緘黙や様々な発達特性が関連していると思われる場合において、保育者がその理解の仕方や関わり方に迷いや葛藤を抱く様子が見てとれた。またこのようなとき、心理職が専門的な心理アセスメントを行なうことで、「気になる子」の理解や支援の検討がより素早く行えるだろう、という管理職の語りもあった【管 Clu.6】。

以上から、もし求めがあれば、それに応じて心理職が心理検査や行動観察などのアセスメントツールを用いた専門的、個別的なアセスメントを行

い、保育者を支援できる可能性がある。具体的には、情緒的側面や認知発達の特徴、知的側面、あるいは社会性のアセスメントなどが挙げられる。それをふまえて心理職は、視覚化や構造化などを用いた関わり方や、子どもの表現しきれていない心情などについて保育者と話し合い、ともに考える役割を果たし得るのではないだろうか。

第二に、「気になる子」の保護者との関わりにおける貢献可能性がある。インタビューで、“現場の私たちが本当は導いていければ一番いいと思うんですけども、やっぱり心理士さんっていう、一つの確立されたその役職といいますか、そういったものの方がいらっしゃるということはすごく親御さんにとってはあれですよ、励みになるというか、安心感にも繋がるのかなと”と語られていたように【保 Clu.7】、保育者と保護者いずれとも異なる第三者の位置づけにあり、かつ専門知識を有した心理職は、一定の説得力をもった見解を保護者に伝達する役割を果たし得る。また前節でも示したように、多くの保育者は発達特性のアセスメントの専門家ではないため、発達特性との関連を思わせる「気になる子」がいた場合でも、保護者に対してその見解を提示することにためらいが生じることがある【保 Clu.7】。心理職はそこで、わが子の気になる部分にどう向き合って育てていけばよいのか迷う保護者に対して、専門的アセスメントに基づいた手立てを提案することができる。

第三に、他機関との連携における貢献可能性が挙げられる。前節で示したように、発達特性に関連した「気になる子」の支援において、外部機関と速やかに連携するためには保育者と保護者との円滑な合意形成が欠かせない。心理職はそれに着手するための判断材料や根拠を示し、保育者たちの判断を後押しする役割を果たすことができるだろう。また【管 Clu.2】で語られていたように、園内に心理職がいれば、連携先とつながるまで時間を要する際に、その期間を補う支援を行なうこともできる。

第四に、保育者を直接的に支援する役割が挙げられる。本インタビューで管理職が危惧していたように、若手保育士が仕事のあり方や対人関係などに悩んで苦しんだり、早期離職したりすることは保育の現場において重要な課題であると考えられる。心理職は上述の三点のような「気になる子」に関連する事項についての支援や、コンサルテー

ションを行うことで、保育者たちをサポートすることもできる。さらに、カウンセリングやメンタルケアの専門家として、それ以外も含めた仕事や人間関係などにまつわる悩みや辛さなどにも寄り添い、精神的支えとなる役割を担い得るのではないだろうか。

5. まとめと展望

以上、保育現場の今日の状況をふまえながらインタビュー結果を吟味し、そこで心理職が担い得る役割について検討した。これらの検討により見出された心理職の貢献可能性をまとめたものが図5である。

最後に、本研究の結果から今後の保育現場と心理職との関係を展望したい。結果をふまえて端的に言えば、保育の現場で心理職がスタッフの一員として常駐できる場合には、そこに様々な貢献可能性が生まれるように思われる。しかしわが国では小・中・高校のスクールカウンセラーでさえも勤務は週に1回程度にとどまっている現状がある。そのため現実的な取り組みとして、さしあたり一週間の中の限られた時間において、心理職がいかにも効果的に保育現場での役割を担っていけるか、その方法論を構築していくことが妥当かつ急務であるだろう。

本研究の検討から浮かび上がってきたのは、保育者それぞれが自身のあり方や保育について、終わりなき試行錯誤と自問自答を重ねている姿であった。その日々の努力の積み重ねから体験的に得られたものこそが、保育者が有する専門性を形作っていることが改めて浮き彫りになったように思われる。それを考えたとき、本論で行ったような心理職の貢献可能性の検討には、限られた時間しか関われないがゆえの限界、つまり可能性を過大に見積もらないための慎重さもまた、欠かせないように思われた。その慎重さを欠くことで、場合によっては現場で保育に携わる人々の迷いや葛藤をさらに増してしまうようなリスクも考えられる。すなわち心理職側には、保育現場で活かされ得る十分な知識を備え、保育者や子ども、さらに保護者等と互いに信頼し合える関係をつくることのできる力量が問われることになるだろう。したがって、それに適う心理職をどのように輩出していくか、という課題を養成大学や職能団体が改めて考える必要がある。

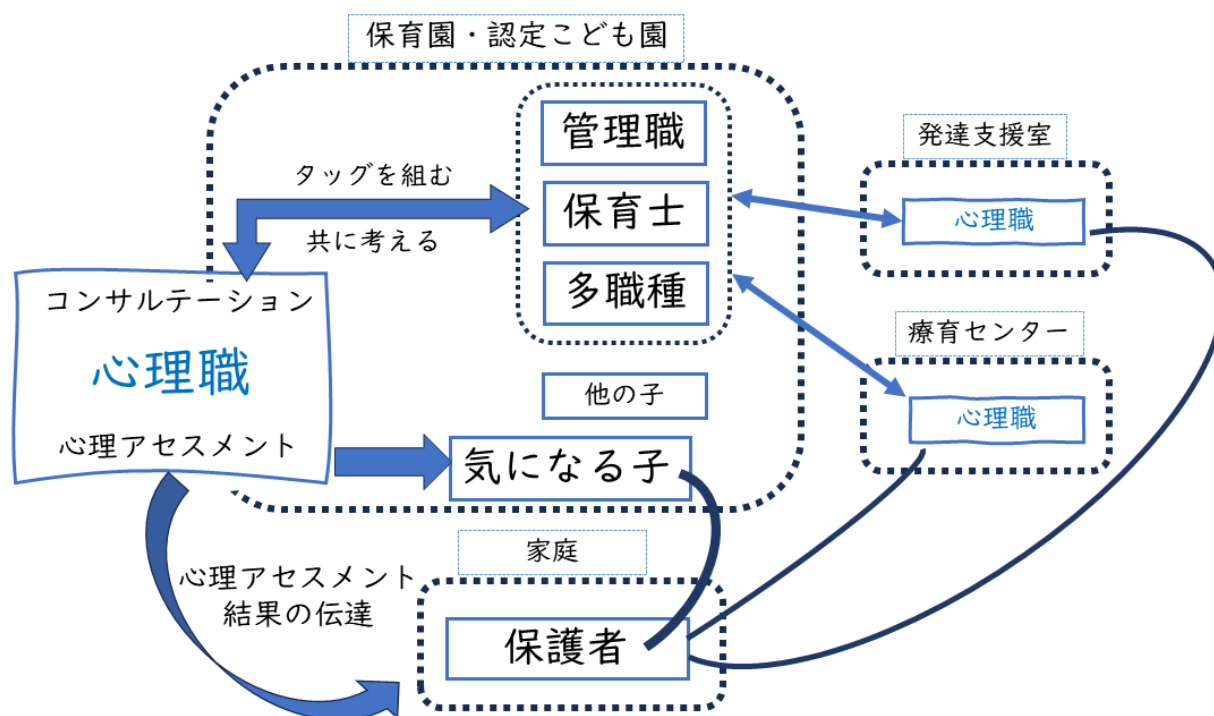


図5. 求められる臨床心理学的支援

インタビューをふりかえると、管理職は若手の保育士の心身の負担を憂慮すると同時に、心理職との協働の必要性和意義を経験的に理解し、タッグを組むことに前向きであった【管 Clu.6】。またそこでは、「若い先生たちは、大変な今に押しつぶされそうになっていくので、そういった時に... (中略)、自分の思いをこうちょっと荷を一つ持っててねって、ちょっと持ってもらえる」というように、素直な心情を受け止めてくれる存在がいるかどうか重要であることが述べられていた。昨今の労働環境における心身両面の過酷さをふまれば、保育者にまず優先的に必要なのは新たな知見というよりも、それぞれが本来有している保育の専門職としての能力や技量が損なわれることなく十全に発揮されることであるかもしれない。心理職の勤務時間に一定の制約があることを前提とした場合には、このようなことを含め、心理職が直接子どもに関わるよりも、保育者あるいは保育者集団の後方支援を効果的に担えるかどうか重要な意味を持つように思われる。

今回のインタビューでひとりの管理職の方が、保育の仕事において大切だと思うことについて、「保育者自身が毎日幸せだなあとか楽しいなあ、子どもと関わるってなんて素敵なことなんだろうっていうふうに思っていること」と語っておられた。そのようなあり方を実現し続けるためには、保育者たち自身が憂いなく、安心して働ける環境整備が欠かせないであろう。心理職がどこまでそこに貢献できるのか、これからも探求を続けていきたい。それはひいては、子どもたちの最善の利益へと結びついていくはずである。

6. 本研究の限界と今後の課題

本研究におけるインタビューは縁故法により協力を得られた方々を対象とした。したがってインタビュー協力者は、心理学を専門とする大学教員らと、ある程度関係性が確保された園に所属していることになる。この点は本研究のデータに、心理学や心理職に対し肯定的なイメージを有するなどのバイアスが生じ得たことを示唆する。これ

は本研究の限界点のひとつとしてふまえておく必要があるだろう。ただしその一方で、縁故法を用いたインタビューであったことで、保育者と心理職が良好な信頼関係のもと支え合うイメージの共有が促進され、より望ましいあり方への展望は描きやすかったようにも思われる。

また筆者らは本研究をふまえた次の段階として、「気になる子」と日々関わる保育者に対し、心理職が実際に現場で心理支援を行うアプローチに取り組む予定である。それを通じ、「どのような力を備えた心理職がより保育現場で貢献できるのか」という、本研究では明らかにしきれなかった問いについても検討を深めたい。そこでどのような成果が得られたか、その結果は稿を改めて報告したい。そして今後は、地域により保育施設の課題や臨床心理学的支援に対するニーズに違いがあることが予想されることをふまえ、他地域と比較することで、心理職の貢献可能性についてより多面的な視点から検討することも求められるだろう。

謝辞

お忙しい中、本研究にご協力いただき貴重なお話しをしてくださいました認定こども園、保育園の先生方に記して感謝申し上げます。

引用文献

- [1] 廣瀬雄一・春日文・黒川こころ・宗杏佳音・田中優・沼田真美・古田雅明・柳川麻華. 保育領域における「気になる子」の定義に関する考察—先行研究の知見をもとに—. 大妻女子大学共生社会文化研究. 2023, 1, p.1-8.
- [2] 石原真里奈・河合裕子・大崎園生・後藤秀爾. 保育所における「気になる子」の実態調査研究 ①—名古屋市中における 2022 年度の現状把握の試みとその概要—. 愛知淑徳大学論集—心理学部篇—. 2024, 14, p.41-54.
- [3] 大崎園生・石原真里奈・河合裕子・後藤秀爾. 保育所における「気になる子」の実態調査研究 ②—「気になる子」のタイプ分けの試み—. 愛知淑徳大学論集—心理学部篇—. 2024, 14, p.55-67.
- [4] 滝口俊子・井上宏子・井口真美. 保育と心理臨床をつなぐ—保育者・心理職・保護者の協働をめざして. ミネルヴァ書房, 2018.
- [5] 春日文・田中優・廣瀬雄一・古田雅明. 保育現

場における心理支援の内容と課題—国内文献の分析から—. 人間生活文化研究. 2022, 32, p.1-15.

[6] 野村朋. 「気になる子」の保育研究の歴史的変遷と今日的課題. 保育学研究. 2018, 56(3), p.70-80.

付記

本研究は、日本心理学会第 87 回大会における一般研究発表（廣瀬雄一・沼田真美・古田雅明・田中優・春日文・黒川こころ・柳川麻華・宗杏佳音「保育現場における臨床心理学的支援の検討—保育者へのインタビューを通じて—」）を加筆修正したものである。

本研究は令和 4 年度大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（代表：田中優 課題番号：K2211）、および JSPS 科研費 23K02282（研究代表：廣瀬雄一）の助成を受け実施された。

Abstract

On-site childcare providers are expected to engage in community-oriented child-rearing support activities and assume more advanced and diverse roles. In this context, the rapid dissemination of knowledge about developmental disabilities has made addressing the needs of so-called “children of concern,” those who draw attention or raise concerns among childcare providers, a particularly crucial issue in the field.

This study explored the need for clinical psychological support in childcare by engaging directly with providers and focusing on issues related to “children of concern.” Semi-structured interviews were conducted with six frontline childcare providers (three nursery school teachers and three managers). Interview data were analyzed by text mining techniques using KH Coder, including hierarchical clusters, stratified co-occurrence networks, and correspondence analyses. The results of these analyses revealed a number of innovations used by childcare workers in their involvement with “children of concern” and their sense of distress when working with them. In addition, management staff showed support for resolving childcare workers’ concerns, especially in managing the collaboration among multiple job categories and other organizations within the facility. Based on the actual situation at the childcare facility, the following four points were identified as potential contributions of psychologists: (1) collaboration utilizing professional psychological assessment, (2) involvement and suggestions to parents, (3) collaboration with other organizations, and (4) consultation with childcare workers based on this psychological assessment.

(受付日：2024年10月1日，受理日：2025年6月6日)

古田 雅明（ふるた まさあき）

現職：大妻女子大学人間関係学部人間関係学科 社会・臨床心理学専攻 教授
大妻女子大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻主任
大妻女子大学心理相談センター所長
大妻女子大学キャリア教育センター併任教員

プロフィール：

専修大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程単位取得満期退学 博士（心理学）

専門は臨床心理学。

一般社団法人日本心理臨床学会 代議員（2021年5月～現在），広報誌編集委員会委員（2014年7月～2018年5月）。

関西国際大学 Well-Being 研究所 客員研究員（2019年4月～現在）。

名古屋大学法学部卒業後，総合物流企業の会社員を経て，専修大学大学院に入学し，臨床心理士の資格を取得。2005年より大妻女子大学心理相談センターに勤務し，親面接や遊戯療法を通して子育て支援に従事。現在は保育心理臨床の研究の他に，力動的な心理アセスメントの教育方法の研究をしている。

主な著書：

乾吉佑監修 加藤佑昌・森本麻穂編著 橋爪龍太郎・古田雅明著 2023年『スモールステップで学ぶ 力動的な心理アセスメントワークブック』（共著，創元社）

香月菜々子・古田雅明 2019年『キャンパスライフサポートブック』（共著，ミネルヴァ書房）

尾久裕紀・福島哲夫編 2019年『大妻ブックレット カウンセラーになる 心理専門職の世界』（共著，日本経済評論社）

クリストファー・ボラス著，館直彦監訳 坂井俊之・橋爪龍太郎・古田雅明他訳 2017年『太陽が破裂するとき ―統合失調症の謎―』（共訳，創元社）